

# 俣野彰三 名誉教授 インタビュー

日時 2021年4月26日（月）午前10時～

場所 人間科学研究科本館2F 会議室A

インタビュアー 中道正之・三浦麻子

## 俣野先生・ご経歴

大阪大学医学部卒業。医学博士。生物人類学，特に霊長類の比較神経学を専門とする。大阪大学歯学部講師・助教授，同医学部助教授を経て，1976年から1995年まで同人間科学部教授（人間生態学，1992-1994学部長）。

## 聞き手

中道正之 名誉教授 大阪大学人間科学部卒業生（第4期）。同大学院，助手，助教授を経て，2007年から2021年まで同教授（比較行動論・附属比較行動実験施設，2014-2016年学部長）。

三浦麻子 教授 大阪大学人間科学部卒業生（第17期）。同大学院，助手，神戸学院大学准教授・関西学院大学教授を経て，2019年から教授（社会心理学）。

---

中道 大学行政よりはアカデミックなところで、俣野先生にさまざまな話を聞きたいと思っています。

俣野 どういったところですか。

中道 私自身は、俣野先生の大学院生ぐらいのときから、軟骨魚類、サメなどから魚類、両生類、は虫類、哺乳類の研究です。そして、私は熊倉先生<sup>1</sup>から俣野先生が名誉教授になられた際の書類よりもさらに詳しいものも頂いています。

俣野 そんなものを持っているのですか。

中道 はい。さまざまな所で彼が書いています。読んでみると、中身を十分理解できるわけではありませんが、研究の幅の広さを感じます。医学部で広く研究され、歯学部に行き、そしてまた医学部に戻られ、人間科学に来られたということですね。

俣野 渡り歩いています。

中道 まず、医学部で軟骨魚類の脳神経の研究を始めたのは、師匠である正井先生<sup>2</sup>の影響ですか。

---

<sup>1</sup> 熊倉博雄(1955-2015) 大阪大学人間科学部准教授を経て教授（人間生態学講座）。在任中に死去。

<sup>2</sup> 正井秀夫(1923-1985) 解剖学者。1948年から1961年まで大阪大学医学部助手・助教授、1972年から死去まで同教授を務める。俣野先生が教授着任前まで大阪大学人間科学部併任教授（人間生態学講座）。<http://www.noro-world.com/~yo/sensei/pdf/ryakureki.pdf>

俣野 正井先生は、当時解剖学の准教授で、私の指導者でした。小濱教授<sup>3</sup>は全く違う分野の人類学です。教授の専門分野は、今はとてもできませんが、現存する人々の集団ごとに集めて、頭の形、顔の形、身長・体重はもとより、骨盤の幅などを計測します。そして人類遺伝学的な、集団遺伝学的な統計の計算をしました。2万人、3万人という日本人を調べ、相互関係から起源を調べていくという仕事でした。日本人はどこから来たのか、モンゴロイドの南限、東南アジアの南の熱帯地区のどの辺りまで入っていたか、あるいはアイヌ人の起源などが専門でした。今なら差別で大騒ぎになるような研究です。

中道 軟骨魚類から幅広く、脳神経など脳を見られ、同時に、人間科学部ができて既に4年経ったときに人間科学部に移られました。俣野先生は、人間科学部でこういった研究をしようと考えたのですか。医学部から歯学部はかなり近いですが、人間科学となるとかなり様相が違います。研究者として教育者として、どのような目的を持っていたかをお聞かせください。

俣野 それは25周年誌の「着任の頃」というところで書きました<sup>4</sup>。私がいた研究室は、医学部の中では解剖学教室で、想像できると思いますが、専門分野の中で進化を研究することが教室のテーマでした。しかし、脳の研究は化石が残りません。発掘でいくら昔のことを調べても、骨はあっても脳そのものが残っていないため、どうしても今生きているものを比較して調べなければなりません。起源を探ろうとすると、動物の種類をさかのぼらなければできません。

水産学校の練習船があってそれに乗れと。捕まったマグロに食いついたサメも捕ってきますから。そのサメを集めるために、半年ほどインド洋に行きました。そういったことから軟骨魚類を見ました。

先ほど言ったように、小濱先生は日本人の起源を研究していました。ここに（「着任の頃」）書いてあるように、もともと文学部の人類学の非常勤の先生でした。そして文化人類学を半年、自然人類学を半年。文化人類学は青木さん<sup>5</sup>の先生の東京大学の中根千枝先生<sup>6</sup>です。あなたがたなら名前は分かるでしょう。

中道 私が入学したとき(1975年)には、まだ中根千枝先生は併任でいらっしゃいました。

俣野 そうですね。あの方が半年講義に来ています。そして、骨やらなにやらの、文学部の方が驚くような堅い生物の話を、私の先生が半年来てしていました。文学部時代、そういった状態がずっとあったと思います。おそらく両方とも社会学系にありました。心理

---

<sup>3</sup> 小濱基次(1904-1970) 人類学者・解剖学者。1953年から1968年まで大阪大学医学部解剖学教室教授を務める。京城学派のひとり。<https://blog.goo.ne.jp/garfsn1958/e/420673b6dc519ef24d6450fd5c5a0af3>

<sup>4</sup> 俣野彰三(1997). 着任の頃 大阪大学人間科学部紀要創立25周年別冊, pp. 125-128.

<sup>5</sup> 青木保(1938-) 文化人類学者。1996年まで大阪大学人間科学部教授を務める(人類学講座)。元文化庁長官。

<sup>6</sup> 中根千枝(1926-2021) 社会人類学者。東京大学名誉教授。大阪大学人間科学部併任教授(人類学講座)。

学は、行動生理に当たる生理心理学の先生は、医学部の生理学教室から吉井先生<sup>7</sup>がずっと来ておられます。下河内さん<sup>8</sup>の先生です。この先生もずっと、医学部と文学部のつながりになっていました。

中道 今、おっしゃったように、文化人類学と自然人類学で、文学部の中に人間科学的な要素をつくってあったのですね。

俣野 詰め込んだような格好で文部省に出した概算要求の中に、欠田先生（助教授）<sup>9</sup>の名前を人間科学部人類学の教授として出したのです。

つまり、本来の人類学は、自然人類学のためにつくられたのです。そして、そのまま続いたため、4階の研究室を作る時に、骨を写すためのレントゲンを入れたのです。レントゲンは、周りを遮蔽しないといけないので壁や床に鉛が入っており、そのための部屋が4階にありました。今でも残っているかどうかは分かりませんが。僕の隣の部屋です。4階は人類学の研究室という格好でした。

人間科学部は、やがて1回生が入ってきて、4年生になって卒業するとき、学年進行で大学院をつくらなければなりません。大学院では独立専攻を作り、人間生態学が新設され、学部レベルが行動系でした。この教授候補として医学部から正井先生が私を推薦したのだと思います。

比較神経学は非常に面白いという前田先生の理解はありました。比較行動に直結するため、進化の過程の適応で、脳がどのように形が変わるかをしていただけるなら、魚でも何でも大歓迎という感じでした。吉田君<sup>10</sup>も魚を飼っていたでしょう。

中道 そうです。

俣野 あれは前田先生の趣味ですか。

中道 そうです。イトヨ、ハリヨの、比較行動学の最初の有名な研究<sup>11</sup>の流れを引いて、前田先生はずっと研究していました。

俣野 あなたと同期の太田<sup>12</sup>、大目木君<sup>13</sup>の卒論の研究試料は魚類でした。しかし、私は、どうしてもヒトに集約しなければならないと思いました。

---

<sup>7</sup> 吉井直三郎(1910?-1997) 生理学者。1948年から1974年まで大阪大学医学部第2生理学教室教授。大阪大学、兵庫医科大学名誉教授。<http://physiology.jp/wp-content/uploads/2014/01/059090336.pdf>

<sup>8</sup> 下河内稔(1927-2021) 生理学者。1974年から1991年まで大阪大学人間科学部教授を務める(行動生理学講座)。

<sup>9</sup> 欠田早苗(1931-) 解剖学者。大阪大学医学部助教授を経て兵庫医科大学教授。<https://www.hyo-med.ac.jp/about/organization/>

<sup>10</sup> 吉田敦也(1953-) 心理学者。情報工学者。大阪大学人間科学部卒業生(第1期)。同助手(行動学講座)を経て、京都工芸繊維大学、徳島大学の教授を歴任(徳島大学名誉教授)。

<sup>11</sup> Nikolaas Tinbergen(1907-1988)による魚を用いた本能行動に関する実験研究。

<sup>12</sup> 太田裕彦(1955-) 心理学者。大阪大学人間科学部卒業生(第4期)。1981年から1991年まで同助手(人間生態学講座)、放送大学を経て、2020年まで関西国際大学教授。<https://researchmap.jp/read0019668>

<sup>13</sup> 大目木良一 人間科学部4期生。堺市役所勤務。

私は、サルの研究ができることは人間科学の大きな利点だということを知っていました。また、比較神経学に行動系に興味を持ってると。ですから、行動系に入ることには抵抗はありませんでした。私自身、脳を研究しているため、動物心理学の後ろは、私はできると思っていました。

肝心の、大学院専攻は人間学専攻でしょう。最終的に脳の比較をサルから人間に上げてヒトの進化を研究すればよい。大阪大学の理学部にはそんな空気がありません。私は、京都大学の人類学教室に行き、石田さん<sup>14</sup>を紹介され助教授を決めました。彼は類人猿のロコモーションの実験をしていました。人類学会でも珍しかったのです。霊長研時代にやったものです。類人猿のチンパンジーの部屋も作り、ロコモーションなどの実験をしてくれました。そして熊倉君につないでくれました。

中道 あの時、小型類人猿のテナガザルも研究されていましたね。それが今、生物人類学研究分野でのテナガザルの研究につながっていると思います。

俣野 そうです。石田君が、科研費に霊長研時代に当たっています。彼らしいのは、「科研は個人のものだ」と言って、霊長研に置いてきたチンパンジーをこちらに連れてきてしまいました。

中道 そういう経緯だったのですね。

俣野 それで熊倉君のドクター論文や友永君<sup>15</sup>の修論を作ったんです。友永君はチンパンジーに惚れて、大阪大学でもチンパンジーで実験ができる所があると教養部時代に知って私の所に来て、チンパンジーの実験をしました。博士課程に進むとき、彼に「どうしてもチンパンジーの研究をするなら、京都大学の霊長研に行かなければ仕方ない。ニホンザルで行くならここで心理実験をいくらでもやれ」と言いました。彼は長い間考え、結局「チンパンジーをやります」と言うので、霊長研に学外留学させました。

中道 先生は医学という枠組みの中で比較神経科学をされ、それが人間科学部発足当時の先生がたにも受け入れられて続けてこられました。それをやっとな直接先生からお聞きして、すっと心に入ってきた気がします。

その後、とりわけ霊長類の中でも原猿の研究を始められました。これには何か戦略があったのですか。

俣野 何か新しいことを旗揚げしなければと思っているとき、アメリカの神経科学協会からニューロサイエンスという2、3冊のシリーズがでました。そこに進化のことを書いた箇所があり、そこで各動物の比較をしてありました。

サルの脳を解説しているのですが、原猿の所だけクエスチョンマークが付いていたのです。そこで、原猿を使えば何かできるのではないかという気になったということと、あの

---

<sup>14</sup> 石田英實(1939-) 人類学者。1989年まで大阪大学人間科学部助教授(人間生態学講座)。京都大学理学研究科名誉教授。

<sup>15</sup> 友永雅己(1964-) 比較認知科学者。大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程を経て京都大学霊長類研究所へ。2020年まで同教授を務める。

頃は、お金があればサルを買えました。それで原猿（テナガザル）を飼いました。太田君に取りあえずラーニングセットの研究をしてもらおうと、松沢さん<sup>16</sup>が、「あの太田の仕事を指導している人は誰なのか。糸魚川さん<sup>17</sup>ではないだろう」と言われましたと、太田君が言ってきた。それほど松沢さんは驚いたようです。原猿はそうして入ってきたということです。

中道 まさに太田さんは、私と同期です。太田さんがラーニングセットをスローロリスでされていました。彼の最初の論文はラーニングセットだけの話だったと思いますが、次の原猿に関しては、先生の脳の話もかなり入れて論文を書いていたと思います。

その後、一気に飛びますが、先生はその後もずっと、大学行政、研究室の教授として学生を指導しながら、自分の研究を続けておられます。海外への留学も教授時代になさっていますよね。

俣野 結局、私のようなことをしている研究者は、世界中にも少ないのです。糸魚川さんの行ったヤークーズ霊長類研究所か、偶然前から目を付けており、正井先生もあそこしかないと言われていた、ドイツのマックスプランク脳科学研究所です。ここには奇抜な教授がいて、世界中歩き回って脳を集め、脳の標本をつくり、顕微鏡で脳の大きさを比較していました。霊長類のほとんどの科が全部ありました。私にとっては、そこしかないという感じでした。

たまたま、文部省の在外研究が行動系に回ってきて、「おまえが行け」と。私はもちろん、「行きたい」と言い、皆さんのおかげで1年間行かせてもらえました。あれがなければ、かなり困っていたと思います。

中道 熊倉先生から聞いた話では、全部で44種の霊長類を研究しておられるということですが、これは驚異的な数字だと思います。その後、その成果を英文の査読論文に着実に書いておられます。帰国されてからも、また比較的最近知ったのですが、先生は今年4月にちょうど90歳になられました。今から20年前、70歳で、『*American Journal of Physical Anthropology*』に単名で出されています<sup>18</sup>。これは驚きました。大阪大学時代は大学行政が忙しく、定年退職後も研究を続けられ、70歳のときに、皆が憧れる雑誌にパブリッシュされています。研究に対するエネルギー、動機づけをどのように持ち続けてこられたのかを聞きたいのです。

俣野 無理をしているわけではなく、自分のしたいことしかやっていません。70歳まで放送大学にいたことも幸せでした。

---

<sup>16</sup> 松沢哲郎(1950-) 霊長類学者。京都大学霊長類研究所教授を経て2020年まで同高等研究院特別教授を務める。

<sup>17</sup> 糸魚川直祐(1935-) 大阪大学教養部助教授を経て、1999年まで同人間科学部助教授、教授（比較行動論講座、1994-1996学部長）

<sup>18</sup> Matano, S. (2001). [Brief communication: proportions of the ventral half of the cerebellar dentate nucleus in humans and great apes.](#) *American Journal of Physical Anthropology: The Official Publication of the American Association of Physical Anthropologists*, **114**(2), 163-165.

中道 私も3月に定年退職しました。先生の今日の話は、私にとっても大変大きな動機づけになりました。実は、今も論文を書いているので投稿することが楽しみです。先生の話聞いて、きょうはマスクをしているので目元しか見えませんが、先生が今の研究の話をしているときの目は、私にとって何とも楽しそうに見えました。

中道 先ほどの人間学専攻の話です。大学院だけが行動、社会、形成<sup>19</sup>が集まって人間学専攻をつくられました。その中の一つの成果として、翻訳シリーズを出されました。それ以外に、違う分野の、脳神経科学から教育哲学、文化人類学など、幅広い人たちが集まり、1つの専攻をつくられました。そこで先生同士でどのような交流があったのか。アカデミックな人間科学としての交流だったのでしょうか。そこでの学生たちの教育に関して、あるいは学生の学問的発展について、今から考えて、先生はどのように思われますか。

俣野 私の日本人類学会と青木さんの日本民族学会が連合で学術大会を開催しています。専攻内の教員間では、専門が異なっても研究を職業とする者としての相互信頼があったと思います。当時のもっとも若手だった人間学の菅野助教授<sup>20</sup>の名句「人間学専攻はサルからサルトルまで」！

厄介だったのは私の講座の大学院受験生でした。制度のしわよせの被害者のようなものですが、太田、熊倉、中野<sup>21</sup>、友永君らはこれを突破してきました。平崎君<sup>22</sup>（現霊長研准教授）から行動学専攻です。ベルリン大学からきたGünther君の時は徳永さん<sup>23</sup>がドイツの日刊新聞記事を和訳させる問題を作ってくれました。

ある外国の研究者が、Human Scienceといっても何のことか全く分からないというわけです。1人のオーストラリア人ですが、ここの学部の英名は、Faculty of Human Sciencesと複数になっているので、それなら分かると言っていました。Human Scienceだけでは、何の学校か、何をやっているのか、そんな学問はないというのです。

私は、この言葉が端的に示していると思います。ここに来た人は皆、自分の専門を思い切りされれば、人間科学であるということになってきました。そして進んでやっていくうちに、横の人とのつながりもでき、発展していくのです。そして、そういうところからまた新しい専攻もできるかもしれないというのが、人間科学部の宿命だと思います。

---

<sup>19</sup> 形成系。教育（学）系の旧称。

<sup>20</sup> 菅野盾樹(1943-) 哲学者。山形大学教養部助教授などを経て1976年から大阪大学人間科学部助教授。1989年から2007年まで同教授（人間学講座）。

<sup>21</sup> 中野良彦(1960-) 自然人類学者。大阪大学人間科学部卒業生（第\*期）。1991年から同助手、講師を経て、現在、准教授。<https://researchmap.jp/read0014276>

<sup>22</sup> 平崎鋭矢(1964-) 自然人類学者。大阪大学人間科学部卒業生（第12期）。1993年から2010年まで同助手・助教（人間生態学講座）、現在、京都大学霊長類研究所准教授。<https://researchmap.jp/read0042845>

<sup>23</sup> 徳永恂(1929-) 哲学者。大阪大学文学部助教授を経て1992年まで大阪大学人間科学部教授（理論社会学・社会学説史講座，人間科学基礎論講座，比較文明学講座，1986-1988学部長）。

このような名前を付けた以上、人間科学部が変わらなければならないことは間違いないと思います。時の流れに悠々としているだけでは済みません。今でこそ人間科学部はあちこちにありますが、できたときはここしかなかったのも、それなりに皆頑張っていたと思います。

中道 今、先生が言われたように、学生は専門を思い切り、好きなだけやって深めていく、そしてその結果として、自分の人間科学というものができるということで、先生は学生の指導も、大学院生の指導もされていたのですか。

侯野 そうです。学生の中に生意気な人がいて、教養部に入れ替わり立ち替わり講義に行き、レポート書かせるでしょう。石田君が行ったのですが、「石田先生、先生は、人間科学部ではなく、理学部で頑張ってください」と書いてあったのです。私しか見ていない、石田君はあれを見ていないと思いますが、驚きました。しかし、学校に入ってきたばかりで、石田君の講義を聴いてこう言うのであれば、それなりの考えがあったと思います。確かに、学生も混乱しますよね。私たちのようなものが混ざっていると、分かりにくい所があったのではないかと思います。初めから覚悟していたのは、私の講座には、それほどたくさん来るはずがないということです。また、中には、人間科学部に入っているながら、社会学や心理学や教育学などにどうしてもなじめず、行くところがないから来たという選択肢の人もいます。学生の学部時代は、そういう人もいます。そのようにして来た人を洗脳したわけで、研究者として残ってくれた比率はいいかもしれませぬ。

中道 そうですね。多いです。

侯野 もちろん、転向した人もいます。経済学部に入り直して、女性で、何という名前か。金沢学院大学に1人います。あなたと近いのですね。

三浦 奥井さんですか。

侯野 剣道をやっていた、奥井さんです。

三浦 奥井めぐみさん<sup>24</sup>は、同期です。

侯野 そういった人もいます。三菱の会社に行っていたのですが、半年で嫌になって辞めて、経済学部に入り直しました。もう1人、文学部の美学に行った人<sup>25</sup>もいます。それはそれなりにいいのではないかと思います。女性が優秀なのがよく分かります。

中道 私からは以上です。ありがとうございました。

三浦 私が先生から頂いたメモで一番驚いたのは、先ほどお話に出てきていた人間学です。自然人類学や、先生のランチがあったということを全く知らなかったため、一番それに驚きました。ただ、先生のお話を伺うと、なるほど、そうだなと思います。人類学と

---

<sup>24</sup> 奥井めぐみ(1969-) 労働経済学者。大阪大学人間科学部卒業生(第17期)。同大学院国際公共政策研究科を経て金沢学院大学経済学部教授。 <https://www.kanazawa-gu.ac.jp/aboutus/teacher/manage-okui/>

<sup>25</sup> 荒木文恵さん(人間科学部14期生)

いうジャンルで考え、その2つが一緒になったということは、今聞くと納得できます。そういう構想が最初にあったのかということに驚きました。

また、今、中道先生からもあったとおり、研究の経緯がうかがえました。まさにその意味というか、それがよく分かったので、非常に勉強になりました。その中に、人間科学の歴史が織り込まれているのだということが、先ほどのHuman ScienceではなくHuman Sciencesだということに全て凝縮されている思いがしました。本当に面白くという言い方は失礼かもしれませんが、楽しく聞かせていただきました。

重ねて質問することは何もなく、私自身が聞かせていただいた感想です。学部時代に、先ほど出てきた、理学部に行って頑張ってくださいとは言いませんが、なぜここまでさまざまなものがあるのか、学生の立場からはよく分かりませんでした。

俣野 そうでしょう。

三浦 特に、人間科学部なので、人間のことで哲学や教育学、心理学があることはもともと想像していましたが、霊長類であれ何であれ、なぜ動物の研究があるのかについては、長い間よく分かりませんでした。恐らく、学生の立場にいるとき私が聞き逃したのか、あまり説明された気がしなかったのです。分からないと思いながら、骨の話を聞いていました。

俣野 あっというまに2年たちますもんね。

三浦 そうです。私も30年たって、分かってきたという感じです。人間科学は、ある程度それでいいのではないかという気がしました。

やはり、Human Sciencesであり、それぞれのHuman Scienceを行うということが、今の自分自身のことにも重なりました。俣野先生が、最初からそういったコンセプトでなされてきたことを、学部ときはなぜこんなことをしているのかと思いつつも、身に付けることができたと思えたことが、一番印象に残りました。ありがとうございました。

(了)